vol.19

老齢動物の病気について（1）

これまで８回にわたって**動物の認知症**についてお話ししてきました。今号では、これまでの**まとめ**として、**「うちの子が認知症かも？」**と思ったら**飼い主さんは何をすれば良いか？**について**私見**をお話ししたいと思います。

「動物の認知症」の特効薬や予防薬については、現在、エビデンスの明確な薬はありません。では、**認知症と診断する必要性があるのでしょうか？**

飼い主が認知症を疑う行動変化としては、以下があります。

・排泄の失敗
・無駄吠え
・家族とのコミュニケーションが取れなくなる（指示に従わない）
・睡眠リズムの変化
・夜鳴き
・徘徊　等

このような症状は、老化に伴い視力や聴力の低下により起きている場合もあるでしょう。しかしながら、上記の症状の中には**「疾患」により起こっており、治療可能な場合も多く存在**します。

まずは、動物病院で**「他の疾患が原因ではないか？」**について診断してもらいましょう。治療が可能な**泌尿器疾患、甲状腺などのホルモン関連疾患、コントロール可能な脳神経疾患**や**心疾患、関節疾患**などが発見されることが多く見られます。

また、診察を受ける際**「認知症」の診断基準**（2023年７月号参照）**を満たすかどうか**についても診てもらうため、**行動変化**や**生活環境**についても獣医師になるべく詳しく伝えてください。メモだけでなく行動に

認知機能不全症候群⑨
「認知症：飼い主は何をすれば良いか？」

文・写真　中西章男
text & photo by Akio Nakanishi

ついては**「スマホで動画を記録しておく」**こともお勧めします。

さらに、現在発現している**認知症類似、関連症状をいかに治療、管理していくか？**について獣医師とよく相談してください。その際、自分あるいは家族にとって何が一番問題となっているのか、改善してほしい**問題点の優先順位**も伝えると良いでしょう。

「動物の認知症」には明確な治療指針がありません。しかしながら初期から適切に始めれば、薬やサプリメントの効果も期待はできそうです。これらは老化に伴う症状の発現を遅らせ、**健康寿命を延ばす可能性**もあると思われます。

それでも**重要なこと**は、薬品やサプリメントに頼り切らず、**飼い主さんとのスキンシップ**や**生活習慣の改善、同居動物も含めた環境についての配慮、バランスの良い食事（栄養管理）、寝たきりにさせないリハビリと適度な運動**が**とても大切**だと考えています。

次号からは「老齢動物の病気について（2）」として「犬の僧帽弁閉鎖不全症（心疾患）についてお話ししたいと思います。

Profile

獣医師・獣医学博士。1959 年生。1986 年日本獣医畜産大学（現日本獣医生命科学大学）大学院博士課程卒。大学ではフィラリア症の血行動態、腫瘍および外科の免疫について研究。1987 年東京都杉並区で「阿佐谷ペットクリニック」を開院。小動物の総合診療医として犬猫のみならずウサギ、小鳥、ハムスター、モルモットなど数々の動物を診療してきた。趣味：ゴルフ、モータースポーツ、機械いじり、動物たちとの戯れ。著書：『車イスに乗ったチロ』集英社